

第 58 号
2025年12月 1 日

〇発行
社会福祉法人
鳥取こども学園

鳥取市立川町5丁目417番地
電話 (0857) 22-4206
<http://www.tottorikodomogakuen.or.jp/>

題字 尾崎悌之助

鳥取こども学園 学園だより



藤野興一先生を偲んで

社会福祉法人 鳥取こども学園

副理事長 田中 佳代子



【はじめに】

鳥取こども学園を今に導いた藤野興一先生は、2023年9月10日ご家族に見守られて天国へ旅立たれました。あと13日で88才という時でした。まだ2年しか経っていないのですが、闘病生活で学園から離れておられた事もあり、今、鳥取こども学園内に興一先生を知らない子どもや職員がいることに愕然とし、記録にとどめなければと思っています。

【出典】

敬愛する藤野興一先生は、鳥取こども学園の初代園長藤野武夫、保育所・鳥取みどり園の初代園長とりの長男として生まれ、幼少期から高校卒業まで学園の子どもたちと共に生活されました。大学進学で鳥取を離れ、卒業後も労働運動や横浜のドヤ街での救済活動に没頭されていたそうです。1976年9月、ご両親の看病のためやむなく鳥取こども学園に戻ってこられたのは35歳の時でした。私が鳥取こども学園に勤めたのが1977年4月でしたから、本当に長い間、お世話になりました。住み込み勤務で1ホーム10人の子どもに職員1人時代、指導員は興一先生1人。2年目で私はホーム長になったのですが、子どもと波長がなかなか合わず、すいぶん手を焼かしました。その分、語り合う時間も多くなり、今では興一先生からの数々の教えが私の財産となっています。

「子どものためなら火付け、強盗、人殺し以外は何でもやれ」

安心・安全・自由を唱え、子どもの無限大の可能性を信じて寄り添い続け、子どもとともに歩む実践家でした。子どものありのままを受けとめ、ご自身もありのままの姿で飾らぬ人柄でした。子どもの利となることは粘り強く諭されつつ、子どもは従わざるを得ないと思念したのですが、それがあって今の自分がいると感謝している出身者は多いです。「子どもの夢や希望は必ず叶える」と専門学校や大学進学実現に向けて「あしながおじさんの会」を発足したり、型破りな手法で、在籍のまま子どもを海外留学させるなど驚くことばかりでした。

「制度があろうがなかろうが子どもに必要なことはやる」

子どもたちに寄り添っていると現状では解決できない課題が見えてきます。制度がないからとあきらめるのではなく、とにかくやる。その精神が10年間寄付金とボランティアリズムだけで歩んだ今の自立援助ホームの足掛けとなりました。全国でも先進的に取り組んだ、児童心理治療施設やこども家庭支援センターもしかりです。

「お金は後からついで」

お金には苦労し続けている法人だと思えます。制度を越えて、寄り添えば、当然、運営は火の車。「制度内のことをしていても寄付

は集まらない。制度を越えて骨身を削って取り組むから助けていただけ。福祉屋にはなりたくない。」と。お金に苦労している割には綱渡りの運営できている法人は、やはり神様に守られているのでしょうか。(事務方の苦労は絶え間ないのですが)

「どうしようもない時はひたすら祈りなさい」

人間の力には限界がある。頭打ちした時は神様に身をゆだねてひたすら祈る。きつと道は開ける。確かに祈りは通じるようです。ここぞという時に救いの手が差し伸べられた事を何度か経験しました。救いがない時は、それを試験として受けとめる強さも育ったようです。

「不幸の会へようこそ」

一昔前、新任職員への歓迎に「不幸の会にようこそ」と伝えていた。子どもは幸せになるが、職員は自分の時間も子どもたちと捧げ続けるので不幸の会と自覚していたが、不幸になるどころか、子どもたちがたくましく成長してゆく姿に感動し、伴走できることが喜びと転じてしまふ「不幸の会」でした。

「ひたすら感謝」

晩年はデスクワークも多く、全国を飛び回っておりましたが、毎週子どもたちと行う夕拝は「唯一の直接処遇」ととても大切に楽しみにされていました。「社会的養護の子どもたちを世の光に」を実践し、鳥取こども学園の理念を継承し続けた偉大な実践家と共に歩ませていただけた事は、私にとって感謝です。興一先生も歩みを支えてくださった関係者・地域の皆様、職員の皆様、子どもたち(出身者)に天国から感謝をしておられることでしょう。そして、鳥取こども学園を今後ともよろしくと見守っておられると思いません。皆さまよろしくお祈り致します。

児童養護施設

鳥取いづも学園

男はつらいよ

ひまわりホーム

ホーム長 出口 洋 貴

猛暑が続いた厳しい夏を超えて、朝夕は少し肌寒さを感じるそんな季節になりました。

私がひまわりホームに移動してから早いもので6度目の秋が来ました。又、とてつもなく要領が悪いので、来た時と変わらず悪戦苦闘の日々を送っております。その中でも特に難しさを感じているのは「自立に向けた子どもへの支援」です。高校卒業が間近に迫ってきており、進学なのか？就職なのか？自分の将来について考えなければならぬ時期を迎える子どもたち。そんな子どもたちに「自分は一体何が出来るのだろうか？」と全く先が見えません。諸先輩方にアドバイスを頂きながら、まずは子どもたちの思いや考えを聞くことを一番に考え、実現するために必要なものは何かを一緒に話をしたり、オープンキャンパスのため県外にも行ったりしました。一緒に実現を

目指し行動を共にする事で、子どもだけでなく私も新たな学びにたくさん出会えたと思います。順調に進んでいるように思えましたが、現実が近づくとつれて次第に不安が膨らむ子ども。自立の事だけでなく生活でも外に出る事が減っていききました。私は基本「困ったら根性論」といった単純な男のため、子どもの抱いた不安にも同じように根性論で訴え掛けますが、子どもの中から不安は消えませんでした。ある日も同じように子どもと話をしようと思いましたが、最初に伝えたのが「頭が痛いくらい悩んでいるんでしょう？」という言葉。その言葉に子どもも素直に頷きました。いつもと変わらない根性論でしたが、この日は子どもの思いが多く聞くことができ、改めてこれからどうしていくのか考える事が出来たのです。私をはじめに言った一言。当たり前のように感じる一言ではありませんが、今の子どもへの気持ちをそのまま言葉にする事で、子どもの中にある気持ちが表出された瞬間でした。このような関わりが自立に向き合う子どもたちには必要なのだと感じました。今も悩みは尽きないし、先のことは全く分かりませんが、子どもに寄り添って一緒に悩みながら自立をサポートしていきたいと思えます。

タコライスと思いやり

つくしホーム

保育士 鈴木 聖 成

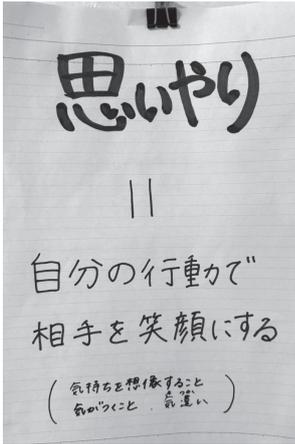
今年の4月から、本園の養護ホームでは「全調理」が始まりました。これまでは炊事さんが用意してくれた食材をホームで調理していましたが、今年度からは買い物から調理まで、すべてをホームで行うことになりました。最初は慣れない部分もありましたが、子どもたちと一緒に取り組むことで思いがけない発見がたくさんあり毎日のご飯がとても豊かな時間になってきています。

全調理を始めて特に感じるのは、子どもたちの食への関心が大きくなったことです。これまでは「今日のご飯は何？」と尋ねる程度だった会話が、今では買い物や調理の場面に広がり、日常的に食べ物について話すようになりました。スーパーと一緒に行けば、「野菜高いな」「お肉高いな」と値段を気にする子がいたり、「この野菜は〇〇に使うよな」と調理法を考える子がいたり、以前にはなかった会話が飛び交います。子どもたちが社会の仕組みや生活の工夫を自然と学んでいる姿を見て私たち職員も嬉しく感じています。また、食事そのものに対する子どもたちの姿勢も少しずつ変わってきました。以前は魚が苦手ですら手をつけ

られなかった子が「魚も高いし、食べてみようかな」と言って少しずつ食べてくれるようになったことは大きな成長のひとつです。食べ物の背景や価値を知ることが子どもたちが挑戦する気持ちを持つようになるのだと感じます。

ある日子どもの一人が「タコライスを作りたい！」と言い出しました。そこで材料を一緒に調べ、買い物に行き、実際に調理を試みることにしました。初めて作る料理で、職員も子どもも手順に迷ったり味付けに悩んだりしながら挑戦でしたが、最後まで諦めずに作り上げることができました。出来上がったタコライスをみんなで囲んだときは、普段の食事とはまた違う達成感と喜びに満ちていました。タコライスを多くよそってあげる、その小さな行動に思いやりが込められていると思いました。





つくしホームでは、幼稚園生から高校生まで幅広い年齢の子どもたちが一緒に暮らしています。日々の生活の中でトラブルが起こることもあります。しかし、私たちが子どもたちと共に大切にしているものがあります。それは「思いやり」です。私たちが考える思いやりとは、ただ相手に優しくするということではありません。自分の行動を通して相手を笑顔にできること、それを意識することが「思いやり」だと伝えていきます。小さな

気遣いや声かけひとつで相手の気持ちが軽くなったり、温かい気持ちになったりすることを、子どもたちは日々の暮らしの中で少しずつ学んでいます。もちろん、うまくいかないこともあります。そのたびに子ども同士や職員と一緒に考え、どうしたら相手も自分も気持ちよく過ごせるかを話し合っています。

食を通じた体験や、日々の生活の中で生まれる出来事のひとつひとつが、子どもたちの成長につながっていると実感し

ます。これからも、子どもたちが安心して暮らす居場所であり続けるために、職員一同、子どもたちの声に耳を傾けながら、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。

私が今伝えたいこと

かつらぎの家

保育士 安本 香織

今回学園だよりを書かせてもらっているあたり、私は文章を書くことや、人に思いを伝えることが苦手ですが、私自身が学んだことをお話ししたいです。私は現在、鳥取こども学園で働き始めて3年目になり、かつらぎの家で保育士をさせていただいています。1年目は、できないことやミスも多くあり、子どもの表面上の言動で自分の感情が左右され、理想と現実のギャップも感じていました。しかし、2年目を過ぎ3年目の今、とても楽しいです。そこには、子どもたちや周りの職員の方々の助言のおかげだと実感しています。

私は、気持ちの言語化が苦手な、相手に自分が伝えたいことと違う意味で伝わったら嫌だなと思い、途中で伝えるのを諦めてしまうことが多々あります。また、相手が求めているものに自分なろうとして相手に合わせてしまうこともあ

ります。しかし、最後まで話を聞いてくれたり、私の思いを汲み取り言語化してくれたりする人と出会ったとき、間違っただけでも自分の言葉で伝えたいという気持ちに気が付き、理解してくれるという嬉しさがありました。私とは違うかもしれないけれど、感情表現、自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手な子どもたちもいると思います。私がされて嬉しかったように、やはり自分をわかってくれる、聞いてくれるという部分があると子どもたちも表現できることに繋がると感じました。

私は3年間の学びを通して、4つのことを大切にしていきたいと感じました。

① 子どもの声を聴くこと
簡単なようでも出来ておらず、子どももですが、大人の中でもストレートに聴くことに怖さを感じることもあると思います。大人側の押し付けにならないよう、まずは聴くことを大切に、そして日々の会話を大切にしたいです。夏頃、かつらぎの家では子どもと大人で権利について話をする機会がありました。いつもは大人だけで評価しますが、子どもが入ることで素直な意見が聞けたことや、やっぱりできていないねと確認ができました。子どもたちの素直な言葉にこそ正解があり、気づかされるなと思いました。直接聞く、正直グサッと来るときもありますが、

その言動にも背景があり、なぜその行動になるのかを探ると本当の部分が見えてくるので、自分も楽になり視野がぐっと広がるように感じます。

② 自分の課題と向き合うこと

子どもと関わる中で、自分自身のトラウマにもぶつかる場面は多くありました。そこに蓋をせず、自分と向き合いながら、子どものトラウマとも向き合っていきたいです。

③ ありのままにいること

これは尊敬する上司からの言葉です。どうしても自分の身を守るために、表面上取り繕う場面は多いです。私自身、伝える事を諦める、人に合わせるなどは自分を守るためにしていると思います。まずは自分があるままであることで、子どもたちにもそれが伝わり、自分を表現できるきっかけになればと感じます。

④ 楽しむこと

同じことをしていても、心の持ちようで見える景色が全く違います。また、大人が楽しいと子どもにも伝染します。まずは自分が楽しむこと、挑戦することを続けたいです。

私自身の課題も見つかり、子どもも大人もそれぞれ何かしらを抱えている中で、どれだけそこに気づき、向き合っているかが大切だと感じました。まだまだ

向き合いは足りませんし、自分ができることも思いません。子どもと関わる中で、自分自身を見つめ直すことができ、これからも一緒に成長ができればと思います。日々関わってくださる職員の方々、子どもたちに感謝を伝えたいです。そして、何事も楽しんでやっていこう！いつもありがとうございます！

児童心理治療施設 鳥取子ども学園希望館

子どもたちに 支えられながら

わかばホーム

保育士 末本 楓

「子どもたちに愛情を伝えたい！」その一心でこの仕事を始めてから気が付けば4年が経ちました。小学生から高校生まで、年齢も性格も様々な子どもたちと一緒に過ごすと日々はあっとい間だったように感じます。

子どもたちそれぞれに個性があり、得意なことや苦手なことも本当にいろいろ。一緒に生活するなかで「みんな、すごいなあ」と感じるものがたくさんあります。

例えば、洗濯や食器洗いなど、自分で

できることには自ら取り組む姿。服を洗濯して、干してタンスにしまう。自分の食器だけでなく、代わりに職員の食器まで進んで洗ってくれる子もいます。私が学生の頃は食器洗いも洗濯も全部親任せ。高校を卒業するまで自分でできていなかったのも、自分の身の回りのことをさちんとこなしている子どもたちの姿に感心します。もちろん、洗濯するのを忘れてしまっていたり、食器洗いを後回しにし、食べ終わった食器がしばらく放置されているときもありますが、それも含めて一緒に過ごす日常の「コマ」です。

そんな毎日の中で私自身も少しずつ得意になってきたことがあります。それは、味噌汁作りです。私は味噌汁作りが得意ではありません。料理、洗濯、何もかもが初めてだった一年目の頃は、味噌汁の作り方を教わるころからスタートしました。正直なところ、今でもはつきり「得意です！」とは言えません。子どもたちから「濃い！」と言われてしまうこともありですが、作り続けていると「今日の味噌汁おいしかった！」と言われることの方が増えてきました。そういう気ない一言がとて嬉しく、心も温まり「よし、また明日も頑張ろう」と思わせてくれます。

上手いかわいかなこともあるけれど、それを受け入れてくれる子どもたちの柔ら

かさや、何気なくかけてくれる言葉に励まされる日も多いです。私が子どもたちの力になりたいと思っているけれど、実際にはこちらが子どもたちに支えられていることの方が多いのかもしれない。これからも、子どもたちとの関わりを通して、自分自身も少しずつ成長していきたいら思っています。味噌汁も、子どもたちとの関わりも、どちらも丁寧に引き合っていきます。

半年を振り返って

さつきホーム

保育士 山田 美月

さつきホームに来てからあっとい間半年が経ちました。私のいるさつきは今年からチーム運営をしています。さつきを利用する子どもはそれぞれ目的を持っておりその目的を達成し元のホームに安心して戻るよう日々頑張っています。そのため、職員は一人ひとりに合った支援ができるよう努めています。また、時には他ホームのサポートに入ることもあるので希望館全体の状況を把握しておかなければなりません。4月当初は、色々なことが初めてのことで不安も多く、「やっつけいけるだろうか？」と悩んだこともありました。何回質問しても丁寧に教えてくださる先輩職員や、沢山話

しかけてくれる子どもたちのおかげでさつきチームは私にとっても安心できる居場所なのだ感じます。時には子どもと思いや意見が食い違ってしまうときもありますが、子どもの思いをしつかり最後まで聞いて話し合っていくことが大切だなと学びました。子どもへの声掛けの工夫や、接し方はまだまだ未熟だと思うので先輩職員の子どもの接し方を見たいところを吸収してもっと子どもたちと楽しく生活していきたいと思っています。この半年で色々なイベント・ホーム行事にも参加しました。イベントでは今まで接することのなかった子どもや職員と関わる機会が増えて自分にとっていい刺激になりました。特に夏に開催された希望館イベントが印象に残っています。夜にナイトウォークがあり、体力がない私は途中、歩き疲れて足が痛くなり子どもよりも先に心が挫けそうでした。しかし一緒に歩いてくれた子どもが笑わせてくれたおかげで楽しく歩き終えることができました。後半土砂降りの雨が降ってきましたが、ずぶぬれになりながらゴールしたのもいい思い出になっています。ホーム行事はBBQが一番印象に残っています。子どもたちも「美味しー！」と満足してくれました。私も大好きなお肉をいっぱい食べてすごく幸せな時間でした。美味しいものを食べつつ

子どもと思いがつくられるBBQは最高なイベントですね！最後に、今後の目標として小さなことですが美味しい料理が作れるように頑張っていきたいです。料理が苦手な方から美味しい！と言って子どもたちから美味しい！と言ってもらえるよう腕を磨いていきます！

日 常

セラピスト 遠藤 佳菜

希望館事務所前には花壇があります。手入れが行き届いているかと言われると、こんなの植えたかな？と思われぬ植物もあつたりします。この春、色とりどりの花が咲いた花壇には、赤ちゃんから大人まで、いろいろな人たちが足を止めて「きれいだな」「かわいいなあ」と花を眺める姿を見かけました。特別記憶に残るようなことではないですが、何気なく足元に咲く花を見かけた、その瞬間はほっとしたひと時をもらってくれます。

こうしたささいな出来事は、案外、日常にあふれています。それによって何か事が起きるわけでもなく、わざわざ思い返すこともない日常の一つです。ただ、同じものを見ても感じ方はそれぞれが違います。その前を通り過ぎていく人もいれば、足を止める人もいます。その方がいいを感じたエピソードについてお話し

たいと思います。ある中学生の何気ない一言、いつも使っている扇風機についてホコリを見て「掃除しないの？」…とよくある日常の一言です。私も毎日のように扇風機を見ていましたが、そこにいたホコリを見ていなかった…というよりも気づいていなかったことを目の当たりにした瞬間でした。その子は普段から扇風機の掃除を手伝っていることも話しており、いたって自然に、扇風機に目を向けて、ホコリがついていることに気づいた…というわけです。

この自然と目が向くというのは、一朝一夕に作られるものではありません。どんな場所でも、どんな人と過ごすかといった日々の生活から、五感をフル活用し、身体にしみこむように吸収されて作られるものであると思います。何気なく見聞きしたものは、その人らしさを作るうえであながち無視できないものではないでしょう。それはたちまち目に見える成果をもたらすわけではありません。しかし、その人の血となり肉となり、深いところで成長を支えるものとなり得ます。そう考えると、今、身を置いている日常が整えられる体験、たとえば、壊れたものがそのままでもなく修理されている、雑草が刈られてきれいになっていることも、成長を下支えしているといえます。誰かが支えてくれている日常には、自然

と「あなたを大切にしたい」というメッセージも含まれます。自分は大切にされているという思いが積みあがっていくと、自ずと、今度は誰かのために…という思いも生まれ、日常をより豊かにしてくれるのではないのでしょうか。誰かが支えてくれているという「つながり」が心の中に生まれると、実際は目に見えなくても、そこに含まれた思いを感じとりささやかな幸せに気づくことができるのではないのでしょうか。何気ない日常でもあり、かけがえのない日常を大切にしていきたいと思います。

乳 児 院

鳥取子ども学園乳児部

え が お

保育士

中 林 美 香

今年も子どもたちの可愛く、思わず笑顔になるエピソードを集めてみました。ぜひご覧ください。



へかりんホーム

食べる事が大好きなAちゃん。離乳食の用意をする時、ご飯の時間だとわかり声を出し嬉しそうにします。離乳食を口に運ぶとニコニコしながら、モグモグと口を上手に動かし食べます。そんなAちゃんの口の中を覗くと、かわいい小さな歯が歯茎から顔を出していました。「歯が生えてきた！」と職員の声に年上の子どもたちが集まってきました。Aちゃんの口を覗き不思議そうに見ていました。「かわいいね」という声にお兄ちゃん、お姉ちゃんから拍手がおこりました。みんな喜んで1日でした。これからまたくさん食べて大きくなってね。

Bちゃんは、小さい赤ちゃんが好き。今日もせせせと世話を焼いています。職員がすることをよく見ていて、食後はタオルで口を拭いてあげたり、ミルクの後には背中をトントンしてあげたりします。やってあげた後のBちゃん的笑容は本当にかわいくて、一緒に笑顔になってしまいます。赤ちゃんが好きすぎて、ほっぺとほっぺをくっつけることもあるのですが、ん、ん、ん？思わず赤ちゃんの上に乗ってしまうことも…。Bちゃんが重くて「えーん」と泣いてしまう赤ちゃん。可愛がっている当の本人は全然気づいていません。またまた満足げな笑顔。職員は泣いている赤ちゃんをヨシヨシしながら、ついついBちゃんのことも許せてしまいます。

Cちゃんと久しぶりに一対一でお風呂に入った時のこと。湯船から洗い場の床に玩具を落としてしまったCちゃんは、職員に「あーあー」と落ちた玩具を指差して、取って欲しいことをアピールしてきます。こういうときにどういえばいいか伝えるために、Cちゃんに今から職員が言う言葉を真似してもらおうことにしました。

職員「と」「Cちゃん」お「職員」惜しいーそれは、お、だーもう一回ーと「Cちゃん」とー「職員」そーうーじゃあ「Cちゃん」「Cちゃん」「Cちゃん」とうとうと

うに一言だけで発音すると」と「は出るのに単語になると、またしても「惜しいー」Cちゃんの思いは伝わってきません。次に職員の名前を呼んで欲しいなと思ひ、職員の名前を同じように一言ずつCちゃんに言うてもらっていると、Cちゃんは始めのやり取りを思い出して急に「てて」と言ってきたのです。この一連のやり取りがコントをしているかのような感じで思わず笑ってしまった出来事でした。

◀くるみホーム▶

2歳のDちゃん。ままごと遊びが大好きで、いつもお友だちや職員と楽しんでます。ある日、色違いのコップを2つ持ち、そのうちの1つを「どーぞ」と職員へ。その後、かんぱーい」の仕草をしながらコップとコップをコッソリ飲む真似をしたあと、「おいしいね」と声をかけるとDちゃんは「はあ〜」とまるでビールを飲んだかのようなリアクション。その「はあ〜」が可愛くてたまらず、何度も乾杯してしまいました！

最近EちゃんとFくんは動くものをキョロキョロと目で追ったり、職員の動く方を見たりというんなことに興味が出てきました。ちょっと前までは隣同士で寝転んでいても、Eちゃんはクルクル回るメリーに夢中、Fくんはボールをにぎ

にぎ！と自分の世界。それが「あ〜」「あ〜」とお互いに顔を合わせ、手を伸ばし合っているではありませんか。なんて幸せな時間と子どもたちの成長も感じながらずっと見ていた気持ちでした。

赤ちゃんが大好きなGちゃん。ホームが別々のため顔を合わすことや一緒に遊ぶ時は少ないですが、会ったり一緒に遊ぶ時があるとGちゃんの顔を赤ちゃんにくっつけてみたり撫でてみたり、赤ちゃんの玩具を持ってきてくれたり、とても思いやりのある優しいGちゃん。赤ちゃんが反応してくれた時にさりげなく見るGちゃん的笑容に、職員まで笑顔にさっちゃんいます。

乳児部の子どもたちのエピソードはいろいろかたがたでしようか。子どもたちと過ごす日々は、驚きと感動の連続です。その時々に見せる笑顔にはいつも元気をもらっています。子どもたちの思いに寄り添い、共感しながら、成長を一緒に喜び、一瞬一瞬を大切にしていきたいです。



認定こども園

鳥取みどり園

◆ひよこ組(0歳児)

ままごと遊びが大好きなひよこ組の子どもたち。当初はお皿に好きな食べ物を入れたり出したりを楽しんでいましたが、最近は赤ちゃん人形のお世話に夢中です。食べ物を食べさせてあげたり、寝かしつけをしたりする姿がとっても可愛いです。

◆りす組 (1歳児)

室内に現れた大きなマット！子どもたちは一目散でマットに駆け寄り、どうしたら登れるものかと足をかけたり、紐を引っ張ったり試行錯誤しながらひたすら挑戦！日々様々な体験を重ね成長していく子どもたちの姿に無限の可能性を感じています。



◆つたぎ組 (2歳児)

身体を動かすことや歌うことが大好きなつたぎ組の子どもたち！タンバリンや鈴などの楽器を使い、思い思いに鳴らしながら表現遊びを楽しんでいます。「あーたのしかったー」「つぎは〇〇のうたがいいー」

など笑顔あふれる毎日を送っています。これからもドキドキ・わくわくがいっぱいな日々を過ごしていこうね♡



◆にじ組 (3歳児)

畑でキュウリ、オクラ、なす、つるむらさきなどを、みんなで水やりをしたり観察したりと大切に育ててきました。みんなのお世話のおかげで大豊作。パスタやナムルやバター醤油炒めなど、夏野菜を使ったクッキングをたくさん楽しみました。先日もキュウリを使ってかっぱ巻きを作って食べました。菜園活動や食育活動を通して、自然に興味を持って心を

寄せ、育てる喜びや友だちと喜びを共有する楽しさを感じています。心も身体も大きくなったにじ組さんたちです。



◆つき組 (4歳児)

〜子どものがやき〜

【野菜に感謝!!】

みんなで育てている夏野菜。毎日お当番さんが、水やり、収穫をしています。大きく育ったきゅうりを収穫したYくん。きゅうりをじっと見つめながら、Yくん

「きれいなきゅうりだね。」

保育教諭

「ほんとだねー」

Yくん

「きゅうり…ありがとう♡」

毎日水やりをし、大切に育てた野菜たちへの愛は本物です♡

【毎日運動会?】

Sちゃん

「あーあ。毎日運動会だったらいいのに…」

保育教諭

「なんでー?」

Sちゃん

「だって、うちらのかっこいいよん、たくさん見てほしいもん!!!」

運動会に向けて気合十分!!友だちと一緒に頑張る中で、自信がついてきました。

やる気満々、キラキラ笑顔のつき組さんです♪





◆ほし組(5歳児)

飼育ケースで青虫の世話をしてきた子どもたち。「みどりちゃん」と名付けて愛着をもち、「何食べるかなあ」「いつ蝶々になるかなあ」と、毎日青虫の様子を見るのが日課になっていました。その中で、「モグモグ食べてる」「ウンチしてる」「もうすぐさなぎになりそう」などと沢山の変化に気づき、少しずつ大きくなっていくことを喜んでいました。さなぎになっても、モニヨモニヨと動く姿に

くぎづけになっていたので、アゲハ蝶になった日は大喜び!! 「羽が葉っぱにあたって切れちゃうから広いところに逃がしてあげよう」という子どもたちの思いから外へ逃がしてあげました。青虫から蝶へ羽化したことを真近でみることで、実体験を通して子どもたちの心にしっかりと残ったように思います。



祈りと共に育つ心

保育教諭 森 本 千 恵

2歳児の世界は、毎日が新しい出会いと発見にあふれています。でも同時に、まだうまく言葉で気持ちを伝えることができません。思いがすれ違つこともたくさんあります。そんなすれ違いの中で涙が流れることも決してめずらしくありません。それでも子どもたちは、その中で何かを感じ、学び取っています。泣いている友だちのそばにそっと座る子。落ちた玩具を拾って黙って渡す子。

「大丈夫?」の言葉はなくても、相手を思う優しさが、小さな行動の中にも表れています。まだ上手く伝えることはできないけれど「友だちを大切にしたい」という心は、少しずつ育ってきているように感じます。

そしてそんな成長のまなざしは、朝の礼拝の時間にも表れています。「お祈りの時間だよ」と言葉をかけると、自然と姿勢を正し、小さな手が胸の前で合わさります。目をつむり、ただ静かに心を神様に向ける姿には、私たち職員もハッとさせられるほどまっすぐで、純粹です。「イエス様のお名前を通してお捧げします。アーメン」

たとえその言葉が最後まで言えなくても、その思いは確かにイエス様に届いていることでしょう。静かに祈る姿に、子どもたちの「心の育ち」が表れています。それは言葉では表せない優しさや感謝の気持ちが少しずつ形になるつとして証ではないでしょうか。日々の遊びの中でも、その芽は確実に育っていると思います。

子どもたちの毎日は、挑戦の連続です。上手くいかないうこと、思い通りにならないこともたくさんあります。積み木が崩れた。靴が上手く履けないなどなど。けれど、その上手くいかないう経験こそ、子どもたちの大きな成長の芽になると思います。

失敗は、決して無駄なものではありません。泣いて、悔しがって、また挑戦する。もう一度やってみようとする心、諦めずに向かっていこうとする意志。そうした小さな「心のがんばり」が子どもたちの内面のたくましさにつながっていくことでしょう。

私たち大人は、どうしても「できたこと」に目が向きがちです。でも子どもの成長は「できた」その瞬間ではなく、そこに至るまでの「過程」の中にあります。失敗しながらも、自分で試し、葛藤する時間。そのすべてが、かけがえない育ちの瞬間です。



祈る小さな手。泣いた友だちの頭をなでる手。崩れた積み木をもつ一度積みもつとする手。そのすべてが、神様の見守りの中で、美しく育まれていくのだと思います。

失敗しても大丈夫！上手くいかなくても、心が育っている途中なのだ信じて、保護者の皆様と共に小さな成長の積み重ねを心から喜び合える保育を続けていきたいと思えます。

自立援助ホーム 鳥取フレンド 鳥取スマイル



加藤 神 将

◆鳥取フレンド

4年目の歩みとこれから…

鳥取こども学園の一員になり早4年目となりました。時が経つのは本当に早いです。

社会的養護経験者の私が初めて職員立場になって見えてくる大変さがあります。

食事や生活の支援だけでなく、学校や関係機関との連携、子どもたちの心のケ

ア…。目の前の子どもにどう接するか。自分なりにやってはいるのですが戸惑う事もたくさんあります。

だって、わたしにとってはデジャヴそのものですから。学校からの呼び出し、送迎。「懐かしいなあ、俺職員があ。凄いなあ」とジーンと来るものがありました。送迎されている子はそんな事はつゆ知らずだと思えます。

少し自惚れてしまいましたが、幾ら社会的養護経験者といえ、まだまだ自分には足りない物が沢山あると痛感しました。勿論子どもたちから教えて貰う事も沢山あります。それでも、わたしの強みでもある「こどもに一番寄り添える、子どもの可能性を信じる。」をモットーにして、5年後・10年後その子たちにとって意味のある支援をしていきたいと思っています。

まだまだ至らない所もありますが、これからもよろしくお願いします。

◆鳥取スマイル

何気ない日々



中 内 凌

去年の7月に入職してから気が付けばもう1年が経ちました。毎日があっとい

う間で、目の前の事でいっぱいだったなあと思います。最初は何をやるにも、思うように子どもたちと話せなかつたり、うまく関われなかつたり…。自分の言葉のかけ方がこれでよかったのかなと、不安になる事ばかりでした。今も正直、自信があるとは言えませんが、それでも少しずつ子どもたちと話す時間が増えてきたのは、自分にとってすごく嬉しい変化です。

朝は「おはよう」から始まり一緒にTVを見たり、食事の後に「今日のご飯美味しかったな」って話し合ったり、ゲームをして一緒に笑い合えたり、ふとした雑談で冗談を言い合えたり、そういった何気ない時間が大事な事なのかなと思って日々過ごしています。

自立援助ホームの子たちは、自分の気持ちを出すが難しかったり、素直になれなかつたりするけど、それでも近くにいる少しずつ関係を作っていくからと思っています。これから自分らしく、焦らず子どもたちにとって安心できる存在になれるように頑張っていきたいです。今後ともあたたかく見守ってください。よろしくお願いします。

児童家庭支援センター 一時養育ホームはちみつ

はちみつの「安心」「成長」

「地域とのつながり」

瀬村 愛未
竹下 敏
前田 明子

はちみつホームにおける「安心」ってなんだろう。これは先日ホーム内で虐待チエックリストを実施した後の話し合いで出たテーマです。はちみつに来る理由は様々ですが、共通することは、保護者から離れて頼りにできる人のいない場所が過ごす、ということ。せめて環境だけはと思い、綺麗に洗濯したシーツやプライバシーを守る個室、温かく美味しい食事等準備して待つのですが、「安心」というものはそれだけでは生まれません。何に安心を感じるかは一人一人違つから、子どもたちと対話しながら、様子をよく観察しながら、言葉に出来ない不安もすくひあげてそれぞれに必要な安心を少しでも届けたいなと思っています。少しづつ緊張の解けた子どもたちの遠慮のない関わりは、私たち職員の大きな喜びです。

はちみつは、お泊りができるあすかり

施設です。普段はお家で生活している子どもたちがやってきます。久しぶりに会うようになっていたり、苦手だったことに挑戦している姿を見せてくれると、私たち職員も思わず笑顔になります。最初は大きな声で怒鳴り散らすしか無かった子が、「ひみじ」「甘えたい」に変わった時の驚きはひとしおです。短いはちみつ

の生活で、「安心」を土台に感情の種類が産まれていく、大きな「成長」です。そしてまた、子どもたちはそれぞれの場所に帰っていきます。私たち職員は子どものお家での生活に思いを馳せながら、今日やってくる別の子どもたちとの生活を始めるのです。

子育てに悩み、戸惑う保護者の声に耳を傾け、まずは「困った」と声をあげられる場をつくること。子どもたちの小さなサインや声にも丁寧に寄り添い、その気持ちが見過ごされないよう支援へつなげていくこと。私たちは、子どもも大人もどちらも大切にされ、安心してホッとできる時間と居場所が地域にあることを目指しています。一人ひとりが「ここにいていい」と感じられるような、あなたがいちばんの輪を広げていきたいと願っています。

里親支援センター
里親家庭サポートセンター
いろは

私と里親の「いろは」

里親等支援員 岩崎 鮎子

チームいろはの一員となり、2年目を迎えました。乳児院で小さな子どもたちに囲まれていた日常が一変し、パソコンとにらめっこしたり、電話対応に緊張したり…そんな毎日を過ごしています。異動となって慌てて購入した参考書は、『ビジネスマナーの基礎』でした。

そんな私が「里親」を初めて知ったのは、短大卒業後に就職した県外の児童養護施設です。当時担当したホームの4歳男児と里親の交流に、何度か立ち会いました。里親と暮らす男児の姿を思い描いていました。その未来は急に途切れました。後に知った理由は、「赤ちゃんを迎えるつもりだった」でした。「〇〇さんはもう会いにこれなくなったの」と伝えた時の、「なんで」と聞くこともなく、あきらめたような男児の表情は、今でも忘れられません。「なぜこんな結果になったのか」「もっと早く教えてほしかった」と、里親を責めてしまう気持ちにもなりました。

そんな気持ちを抱えながら、私は大学に編入し、里親と子どもの関係がうまくいかず、里親家庭での暮らしが継続できなくなる「里親不調」をテーマに研究しました。不調の理由は様々で、複雑に混ざり合っていることを学びました。頭では理解していても、気持ちはなかなか追いつけず、里親に対して複雑な思いを拭ききれずにいました。

いろはで働き始めて、たくさんの里親家庭との出会いがありました。その出会いの中で、私の里親像は変わっていきました。里親家庭の交流を目的とした「里親サロンいろはな」は、里親の悩みからヒントを得て企画しています。「里親家庭ならではの情報交換ができる」と毎回多くの参加があります。里親が話すエピソードはとても具体的で、子どもの表情や仕草などよく見ていることが伝わります。本当に子どもに対して一生懸命です。そんな里親家庭との関わりを通じて、ふと思いつくことがあります。「あの時の里親は、こんなふうに話せる場や話を聞いてくれる人がいなかったのかな」と。いま私は、里親の話を聞くことができますし、里親にとって必要である場所を作ることができます。里親だけに抱えさせないためにできることを考え、いつでも手を差し伸べられる存在でありたいと思います。子どもを迎え入れ、いろはと同じ2年



8月にリニューアルしたいろはでお待ちしています

目になる里親がいます。新米相談員の私を受け入れてくれ、いろんな経験を一緒にさせてもらいました。今でも里親家庭の大切なイベントに「右崎さんもしょにどこですか?」と誘ってくれます。そんな里親との日々をこれからも大切にしていきたいです。

私の里親像が変わったように、「知るこ」と変わる未来があることを信じて、これからもいろはは、里親を広める活動を行います。ご協力お願いします。



いろはHP・SNS

就労継続支援B型作業所

はまむら作業所

毎日の原動力

管理者 山岡 宏樹

「久しぶりー!」「あんな〜昨日な〜」「何
だいな、元気がないがな、どがしただ〜…」

今日も朝礼前から、利用者さん、職員、
時にはボランティアさんがはまむら作業
所の作業棟に集っていろんな会話が始
まっています。送迎の時にも車内で個々
の会話は聞かれるけれども、事業所に着
くとまた違います。事業所に着くと話し
たい利用者さんがそれぞれ自然と会話が
弾みますし、近所の方がふと来られて
も、同じように会話が始まります。ほぼ
同じ顔ぶれの方が毎日に近いくらいに顔
を合わせているけれども、会話の内容も
表情も日々違います。これは、14年前か
ら私がずっと見ている光景ですが、未だ
に慣れません。慣れないというのは、「何
がそうさせるのだろうか」という感覚で
す。一人ひとり、障がい特性や生活環境
等は同じでないので、毎日の気持ちや体
調に変化はあり、はまむら作業所に来ら
れる目的や目標も異なって、また年齢も
ばらばらですから、そこに同じ状況とい

うのではないのですが、「会話の時間」が
自然と流れています。月日の経過の中で
利用者さんも、職員構成も変わってきて
いますが、とにかく事業所では何年も話
声が絶えないなあと感じています。先
日、来客者の方に「はまむら作業所の利
用者さんは、何となくゆったりとした雰囲気
で作業されておられますね。」「自然
な感じの作業の雰囲気はほんわりして
いますね。」「とコメントいただきました。
「これかな…」

確かに、就労継続支援B型の事業所で
すから、時間になると事業所内外での作
業はしっかりとしています。が、私たちの
そこには会話が絶えずあり、そこに過ご
し易さ、チームワークや活気、時には小
さなトラブルはあります。職員もその場
で関わり、一緒に作業したり過ごした
り、時に見守ったり、これをずっと続け
て今に至っています。利用者さんは会話
の中で表情が変わったり、考えがまとま
り言えるようになったり、数年いる方は
会話量その物が変化していったり、これ
が日々の変化を生み、また繋がり、今日
もはまむら作業所に足を運ぶ事につな
がっているのかなと思います。社会一般
的に静かな環境で作業が求められる会社
もありますが、他者の中で「関わり続け
る事」が「毎日働き続ける事」に繋
がっており、生きていく力になっていま

す。これが「はまむら作業所らしさ」「集
う原動力」に関係しているのだろうと思
います。これからも私たちのチームは、
関わりの中で、利用者さんの様子の変化
や活動のヒントに気付いていきたいで
す。そして、関わりの中で一緒に居て、
苦楽をともにし人生の貴重な時間を感じ
ながらお互いに成長していきたいです。

診療所

人間の発達クリニック

辿り着いて、

「ナルホイヤ」

川口 孝一

テレビっ子だった私がテレビの無い生
活を始めて（切っ掛けは単に世界陸上を
観ていたら突然ブチっと切れたから）十
数年以上経ちますが、ラジオを聴く事が
多くなりました。よく聴くお勧めしたい
番組は、金曜日午後9時5分からの作家
高橋源一郎さんの「飛び教室」と土曜日
午前8時5分からの俳優石丸謙二郎さん
の「山カフェ」があります。いずれもN
HKラジオR1で、聴き逃し配信でも聴
けますので聴いてみてください。

昨年12月の「山カフェ」のゲストに探

検家・作家の角幡唯介さんが出演された
事がありました。角幡さんはここ数年、
北海道の日高山脈で「地図なし登山」に
挑戦されていますが、以前には一年半の
間北極圏のグリーンランドで犬ぞりで狩
猟の旅をしながら暮らすという体験もさ
れており、そこで出会ったイヌイットの
人々についても紹介されました。彼らに
明日の天気や予定等を聞くと、不機嫌そ
うに少し強い口調で「ナルホイヤ」と
返って来るそうです。彼らがよく使う
「ナルホイヤ」とは、「わからない」「な
んともいえない」という意味だそうです
が、「未来や計画に縛られず、目の前の
『今』に集中し、それに没入することを
肯定する」と言うイヌイットの人々の世
界観を表す言葉でもあるようです。厳し
い環境の中で暮らす彼らは、自分たちも
自然の一部にしか過ぎない事や自然の厳
しさや不確実性をよく知っていて、自然
と共に今を生きるしかないという悟り、流れ
に身を任せているのでしょう。

「ケ・セラ・セラ」(なるようになる)。
故藤野興一会長も、「ケ・セラ・セラ、や
るだけやったら、後は天に任せるしか
ない」と、生前よく言っていました。私も職
業柄、よく「治療方針は？」等と聞かれる
事がありますが、「分かりません。ありま
せん。行き当たりばったりです」とお答え
するしか出来ない事がよくあります。ある

方と関わる時、その方の背景や関係性はたくさんあります。しかもそれらは時間と共に変わっていきます。なので、先の事など私には到底一言で語ることは出来ません。その方の「今」を「共にある」事しか出来ません。それも簡単ではありませんが。

66年間生きて来て、40年間臨床に携わって来て、辿り着いたのは、「ナルホイヤ」でした。あと何年、学園で働けるのか、働かせてもらえるか、先の事はナルホイヤですが、最後まで子どもたちの環境の一部であり続けられたらと思います。よろしくお願い致します。

事業所内保育施設
とりっころんど

子どもたちの好奇心

看護師 伴 雄 二

私が鳥取子ども学園に入職して3年目になりました。2年間乳児部に所属し、今年度は事業所内保育施設とトリっころんどで勤務しています。まだまだ3年目の未熟者ですが年齢は40歳過ぎたおじさん…。また前職は病棟勤務で高齢の方と接することが多かった為、乳児部での1年

目は子どものが理解できず悪戦苦闘の日々でした。しかし、子どもたちと共に生活する中で様々な経験から、子ども目線で過ごすことの大切さを知りました。そうしてみると「子どもって凄い!」と思うことがあります。それは好きな遊びや興味のある物事に取り組み集中力。つまり好奇心なのでしょう。3歳前半のA君は昆虫博士。ダンゴ虫や蝶、カブト虫やクワガタに興味津々。特にセミには詳しく戸外遊びや散歩でセミの鳴き声を聞くと、部屋に戻ってから昆虫図鑑をひらき、職員にどの種類のセミなのか指をさして教えてくれます。また皆さんはセミの種類によって鳴く時間帯が違うことをご存知ですか?例えばヒグラシは夕方と朝しか鳴きません。A君は知っていました。とりっころんどに異動してからも子どもたちの好奇心には驚かされるばかりです。2歳後半のBちゃんはお料理が大好き!「Bちゃんママだよ!」とつい、おままごとセットのフライパンや鍋に食材を入れて、綺麗に盛り付けをして料理を振る舞ってくれます。そんなBちゃんは食事も大好き!いつも「きょうのごはんはなに?」「きょうのおやつはなに?」と聞きます。特に大好物のメニューだと両手を挙げて「やった〜」と大喜び。また分からないメニューや食材を見ると「これなんだろう?」と首を傾

げて考えます。Bちゃんにとって食事も好奇心の一つなのでしょう。ある程度年齢を重ねて保守的になっていた私にとって、子どもたちの知的好奇心はとても刺激になっています。少し前に「時間は有限、努力は無限、後悔は永遠」という言葉を知り、その通りだと感じました。今は私の座右の銘です。これを機会に自身も好奇心をもって、色々と新しいことにチャレンジしようと考えています。まずは苦手なパソコンを上達させるためにパソコン教室に通ってみようと思います。最後に、とりっころんどの影の立役者を紹介致します。それは子どもたちの元気の源。

前述で述べた食事やおやつを作ってくださっている栄養士と調理員の方々に



す。貼付した写真は手作りおやつと子どもたち。この笑顔を直接お見せできなく残念ですが、栄養士と調理員の方々には感謝しています。毎日ありがとうございます!!



鳥取養育研究所

子どもたちと

新種のチョウ発見!

鳥取養育研究所 事務局長

(鳥取)ごも学園 理事長

藤野謙一

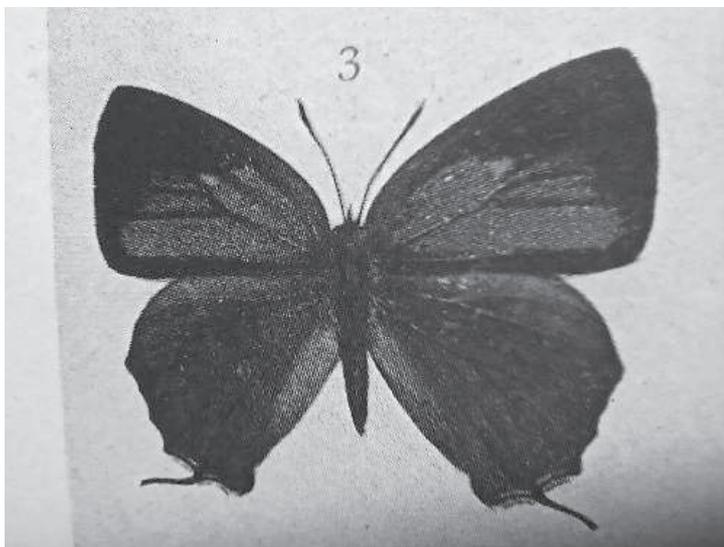
鳥取養育研究所では、2008年から鳥取ごも学園の歴史研究を続けて17年目になります。今回は、鳥取育児院（現鳥取ごも学園）の藤野武夫園長と子どもたちが新種のチョウ「ヒサマツミドリシジミ」を発見したというエピソードを紹介します。



久松山へ昆虫採集 (右 藤野武夫)

『昭和8年（1933）7月3日に鳥取市久松山（260m）の中腹で当時鳥取県立鳥取第二中学校の石賀紘君が1頭の見慣れぬチョウを採取し、同校の永見一男先生に見せました。先生も種名がわからないため、同定をしよううためこの標本を東京の内田清之助博士に送りました。博士は色々調べた結果「新種」と判定されましたが、この標本は東京に届いた時はバラバラに壊れていたため、もっと他の標本が集まるまで保留となりました。またこの年に鳥取育児院の藤野武夫先生も同院の子どもたちが久松山水道谷で採集した未同定の本種2頭を持っておられました。翌昭和9年には内田博士の指示で永見先生、藤野先生らが6〜7月に久松山から栗谷へかけて相当数の雄雌を採集され、これらの中から5頭が永見先生を経て内田博士へ送られ、この年にヒサマツミドリシジミと命名されて正式に新種として発表されました。またこの年から噂を嗅ぎつけた県外のチョウ愛好家が大勢鳥取市を訪れましたが、採集される数は年を追って少なくなり、遂には全然採集されない年もあったので、このチョウは珍種として一層有名になりました。なお藤野先生の標本は直接東京の平山修次郎氏へ送られ、昭和12年に同氏が発刊された『原色千種続昆虫図譜』にはこの標本が使用されています。』

（自然探訪② 山陰のチョウたち／山陰むしの会／山陰中央新報社／1994）



ヒサマツミドリシジミ(原色千種続昆虫図譜)

当学園事業へのご寄付 後援会へのご加入に 感謝申し上げます。

前回報告以降、現在まで、ご寄付いただいた方々、後援会に賛同(会費納入)していただいた方々は、下記のとおりです。

心より感謝し、ご報告申し上げます。

寄 付 者 (R 7. 4.22 ~ R 7.11. 6)

敬称略

氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
秋 崎 るり子	代表取締役 林 誠	柴 田 和 仁	花 木 正 史
浅 野 和 子	株式会社 コタニ	柴 田 隆 嗣	濱 本 英 機
阿 部 正 昭	代表取締役 小谷 憲司	正 林 督 章	はやし社会保険労務士事務所
いしど歯科クリニック	株式会社 清水	白 井 道 子	林 義 雄
井 須 尚 紀	株式会社 信勝丸漁業	菅 原 崇	原 井 た き 代
磯 田 教 子	代表取締役 山岡 寛人	寿 司 江 戸 吉	原 田 潤 哉
伊 谷 須 美 子	株式会社 竹内クレーン工業	勢 木 宇 太 郎	半 田 卓 実
伊 田 美 可 子	取締役会長 竹内 秀明	大雲院地藏盆子ども夜店	東 邦 子
市 野 順 子	株式会社 保健企画	高 橋 会 計 事 務 所	平 尾 正 人
伊 藤 継 俊	代表取締役 中嶋 直己	高 橋 岑 俊	広 谷 笑 子
伊 藤 文 代	株式会社 トータルエナジーオオタ	竹 内 一 昭	吹 野 之 彦
井 上 康 夫	代表取締役 太田 栄市	竹 下 努	福 寿 み ど り
医療法人きむら耳鼻咽喉科医院	株式会社 ミナミコーポレーション	竹 田 江 海 子	藤 井 喜 臣
理事長 木村 寛	代表取締役 岡本 安量	武 田 功	藤 井 重 明
医療法人さとに田園クリニック	株式会社 ヤマネ機材	武 安 泰 雄	藤 井 秀 樹
医療法人社団荻原医院	代表取締役 山根 克仁	唯 聡 太	藤 原 雅 夫
医療法人社団乾医院	神 谷 夏 子	田 中 和 子	藤 原 毅 芳
理事長 乾 俊彦	亀 本 良 一	田 中 佳 代 子	古 川 潤 一
医療法人三木眼科	川 口 ア ヤ 子	田 中 昶 恵	ほんものショップ モリケン
岩 崎 薫	川 口 孝 一	谷 垣 由 紀 恵	前 田 俊 和 子
岩 田 美 代 子	川 口 正 男	谷 口 勝 也	前 田 洋 子
岩美町民生児童委員協議会	菊 地 み つ え	谷 口 繁	巻 田 豊 子
児童・青少年福祉部会	岸 田 栄 子	谷 口 義 明	松 下 暢 子
上 嶋 純 子	喜 多 寿 美	谷 口 義 明	松 永 隆 夫
宇 倍 神 社	北 村 真 里 菜	谷 島 伸 二	松 永 陽 明
江 谷 孝 明	北 室 育 子	田 村 明 子	眞 鍋 裕 亮
太 田 栄 市	吉 成 寺 則	田 村 利 江	美 川 寛 二
大 塚 福 子	木 下 尚 則	綱 島 健 之	三 木 康 二
大 西 絵 里	木 村 和 子	鳥 取 医 療 器 株 式 会 社	光 田 澄 子
大 西 雅 廣	木 本 裕 治	代表取締役 玉木 淳二	み な み 歯 科 医 院
大 森 琴 世	草 野 雅 昭	鳥 取 県 教 職 員 組 合 東 部 支 部	み 石 田 悦 子
岡 本 小 児 科 医 院	高 力 房 枝	鳥 取 東 更 生 保 護 女 性 会	村 上 悦 子
岡 本 賢	郡 ひろ 子	会 長 芝 岡 み ど り	村 上 松 幸 枝
岡 本 智 鶴 子	小 竹 原 寛	鳥 山 玲 子	村 松 幸 枝
小 椋 孝 昭	小 谷 邦 子	中 尾 文 裕	森 田 元 章
尾 崎 三 智 子	小 原 知 子	中 嶋 哲 一	八 頭 更 生 保 護 女 性 会
尾 崎 俣 子	財 田 俊 子	中 野 教 代	会 長 西 本 ひ ろ 子
尾 田 一 壽	齋 藤 禎 一	中 山 嚴 雄	山 口 ひ ろ み 子
カネコ カズミ	澤 田 智 子	西 上 洋 治	山 下 孝 子
勝 原 雅 人	山陰酸素工業株式会社	西 村 眞 一	山 田 金 庫 店
株式会社 アベ鳥取堂	鳥取支店 支店長 山本 一徳	日 海 通 信 工 業 株 式 会 社	山 田 弘
株式会社 ウィードメディカル	サンユー技研工業株式会社	畑 山 博 史	山 田 敏 明

氏名	氏名	氏名	氏名
山中友子	有限会社 亀井堂	吉田由美子	川口明子
山根一洋	代表取締役 地原 忠実	米谷食品センター	コヤマ ショウジ
山本智文	有限会社 スバル保険	リセット 溝口 智子	Minami English School
有限会社 岩田小型運送	代表取締役 松永 隆夫	龍 福 寺	河 口 欣 微 子
有限会社 ウコン自動車	有限会社 鳥取システムサービス	渡 壁 節 子	
代表取締役 右近 謙治	有限会社 山本ハウス工業	野 田 徹	

物 品 寄 付 者

(R 7. 4.12 ~ R 7.11. 8)

敬称略

氏名	氏名	氏名	氏名
有限会社 紀ノ国屋本店	黒川竜次(代表)	大 雲 院	福 本 真 理 子
前 田 沙 織	総合建設 T K R	有限会社 才 ダ	前 場 大 輔 子
U F O 秋 里 店	株式会社 クロカワ	代表取締役 小田 大介	松 下 暢 子
U F O 扇 町 店	セブンイレブン	大 樹 寺	松 永 隆 夫
U F O 叶 店	鳥取雲山店	谷 口 秀	山 根 な お こ
U F O 吉 方 店	株式会社 ぎしき	中四国アイスクリーム協会	山 本 大 順 (静 彦)
石 賀 正 博	E & S	理事長 波多野和彦	米 谷 希 望
井 原 理 佳	創 技 建	土 井 倫 子	龍 岩 寺
大 坪 千 世 子	石 上 農 業	鳥取砂丘ライオンズクラブ	鳥取ライオンズクラブ
荻 原 律 雄	株式会社 重工舎	会長 田嶋 広美	鳥取南更生保護女性会
奥 田 吉 春	優 和 工 業	鳥取中央ライオンズクラブ	会長 岸 本 美 鈴
	C H A I N	南 條 和 子	谷 口 隆 之 佳
勝 原 洋 子	森 本 農 園	に く や 鳥 取 店	森 田 利 寺
力ドワキ ヒロカズ	fille-mens-tottori	野 田 徹	森 福 た 子
金 森 興 太 郎	現 録 水 産	服部 権兵衛 養 蜂 場 央	田 中 芳 子
金 田 透	小 坂 明 彦 小 林 文 司	服 部 真 一 幸	国 府 東 小 学 校 P T A
株式会社 ヤマネ機材		ぱ に 一 幸	山 本 雅 文
北 村 裕 美 香		福 石 幸 生	



常務理事 山 本 隆 史 記

クリスマスは

『愛』の精神を思い起こすひととき ~ クリスマスを祝うひととき

社会福祉法人鳥取こども学園では、毎年十二月、クリスマス時期に「クリスマス祝い」を開きます。こどもたちの歌声や劇、笑顔に包まれるこの行事は、単なる季節の催しではなく、私たち鳥取こども学園が百二十年大切にしているキリスト教の『愛』の精神を、もう一度皆で見つめ直す大切なひとときでもあります。

クリスマスは、今から約二千年前、イエス・キリストがこの世にお生まれになられたことを記念する日です。イエスは宮殿というきらびやかな場所ではなく、馬小屋という貧しい場所で生まれました。そして、この大切な出来事を最初に知らされたのは、人々に差別されていた羊飼いです。これは、神の愛が、権力者や金持ち、特別な人のためだけでなく、すべての人、特に小さく弱い立場にされた人のもとに届くことを示しています。

イエスが人びとに伝えた最も大切なことは、「互いに愛し合いなさい」という言葉でした。この『愛』とは、単なる感情ではなく、他者、それも悲しんでいる人、困っている人、寂しい人を思いやり、理解し、支えようとする生き方そのものです。私たちが理念として掲げる『愛』とは、まさにこの一人ひとりを尊び、受けとめ、共に歩む心することを意味しています。

日々の営みも、この『愛』の実践にほかなりません。こどもたちの安全で安心な生活を保障すること、悩みを聴くこと、寄り添い成長を見守ること、共に悲しみ共に喜ぶこと...これら職員の一つひとつの関わりの中に、クリスマスの精神が息づいています。

クリスマスを祝うという行為は、ただ単に過去の出来事を記念するだけではなく、今の瞬間にも、『愛』がこの世界に生き続けていることを思い起こすことです。そして私たちが自身も、その『愛』を分かち合う者として歩みたいと願っています。

どうかこの季節、子どもたちと職員一人ひとりの心に、神さまの『愛』の灯があたたくともりまわります。

そして、私どもを支えてくださるすべての方々のごえに、平和と神様の祝福が豊かにありますように。

メリークリスマス！

※1 新型コロナウイルス感染症により、これまでのように学園の体育館にこどもたち、保護者のみなさん、そして関係機関のみなさまが一堂に会しての開催ができなくなり、2022年よりオンラインによる開催となっております。

法人本部よりお知らせ

ご寄付に関し2点お知らせします。

ご寄付の方法について

ご寄付は複数の方法で受付していますので、ご自身の状況に合わせてご利用ください。

- ①現金 受付は法人本部（管理棟事務所）
- ②振込
 - a 郵便振替 01490-9-9106 ※学園だよりに専用紙同封
 - b 鳥取銀行本店営業部 普通預金 7645611
 - c 山陰合同銀行鳥取営業部 普通預金 3422812
 いずれも口座名義は「社会福祉法人鳥取こども学園 理事長 藤野謙一」です。
- ③クレジット決済
 - a 法人ホームページ <https://www.tottorikodomogakuen.or.jp/>
 <募金のお申し込み>をクリック
 <募金のお申し込み（クレジット決済）>ボタンをクリックして入力
 - b シンカブル <https://syncable.biz/> ※寄付のプラットフォームサービス
 「団体を探す」より「鳥取こども学園」と入力し検索をクリック
 「鳥取こども学園」を選択、<支援する>ボタンをクリックして入力



法人 HP



シンカブル

ご注意

- 郵便振替は寄付金・後援会費共通の口座となっておりますので、専用紙からお支払いされる時は、寄付金・後援会費のどちらかに〇をご記入ください。
- 銀行振込の際は、領収書をお送りしますので、お名前・ご住所をお知らせください。
 連絡先 〒680-0061 鳥取市立川町五丁目417番地 法人事務局
 電話 0857-22-4206 FAX 0857-23-0242
 代表メール toriko@tottorikodomogakuen.or.jp

後援会の銀行口座もごさいます。

振込口座 鳥取銀行本店営業部 普通預金 0405970
 口座名義は「鳥取こども学園後援会 会長 村上亜由美」です。

税額控除に係る証明書の送付について（個人の方が対象）

確定申告で寄付金控除を行う際、選択肢として税額控除制度をご利用頂くのに必要な証明書です。これにより、従来の所得控除制度が税額控除制度どちらか減税効果の大きい方を選択して頂けるようになりました。

令和7年4月以降の個人名でのご寄付には証明書を添付しておりますが、4月以前のご寄付（令和7年1月～3月）についても対象となっており、状況を確認し証明書を送付させて頂きまますので、確定申告にご利用ください。

なお、控除について詳しくお知りになりたい方は、お近くの税務署までお問い合わせをお願いいたします。

●銀行口座へのご寄付は下記へお願いします

法人本部：〒680-0061 鳥取市立川町5丁目417番地 鳥取こども学園内
 TEL 0857-22-4206 FAX 0857-23-0242
 代表メールアドレス：toriko@tottorikodomogakuen.or.jp

振込口座：郵便振替 01490-9-9106
 鳥取銀行本店営業部 普通預金 7645611
 山陰合同銀行鳥取営業部 普通預金 3422812

口座名義：社会福祉法人鳥取こども学園 理事長 藤野謙一

※なお、郵便振替は寄付金・後援会費共通口座となっておりますので、寄付金・後援会費のどちらかに〇をしてご入金ください。

また、銀行振込の際は領収書発行のため、お名前・ご住所をお知らせください。

●後援会会費は下記へお願いします

振込口座：鳥取銀行本店営業部 普通預金 0405970
 口座名義：鳥取こども学園後援会 会長 村上亜由美

【お願い】

この「学園だより」は、当法人にご理解、ご協力いただいている皆さまに、施設での出来事、様子等を報告する意味で発行しています。同封しています寄付金・会費の振込み用紙は、あくまでも皆さまの便宜を考慮のことですので、ご理解いただきますようお願い致します。今後とも、当法人を温かく見守って下さいますよう、心よりお願い申し上げます。